

韓国の日本語教科書事情

三 枝 優 子

(文教大学文学部)

The Current State of Japanese Textbook in Korea

SAEGUSA YUKO

(Faculty of Language and Literature, Bunkyo University)

要 旨

韓国の高校では今年度より第7次教育課程が適用された。第二外国語科目の日本語科目でも教育課程や教育、社会の環境の変化により新しい教科書や教材が作成されている。第7次教育課程の特徴は日本文化理解と国際交流への積極的態度を養う、インターネット上で日本語検索ができるようになるなどが目標に盛りこまれた点である。本稿では第7次教育課程の特徴と新教科書の内容について述べ、また、今後の課題についても述べる。

1 はじめに

韓国では世界の日本語学習者の45%を占める95万人以上¹⁾の人々が様々な学習目的を持ち、様々な学習機関で日本語を学習している。そして、その学習者の8割が第二外国語として日本語を学ぶ高校生である。韓国内では1997年に第7次教育課程(日本の指導要領にあたる)が公布されたこともあり教科書や教材、学習環境も大きく変化してきている。

本稿では多様化する韓国日本語教育界の中心にある高校での日本語教育に注目し、日本語教師に対して行ったインタビュー調査²⁾結果も踏まえ、外国語科教育課程³⁾と教科書の現状と課題を述べる。

2 教育制度と環境

韓国の教育制度は日本と同じ6・3・3・4年制で、国が定めた教育課程に則り授業カリキュラムが組まれている。

教科用図書(教科書と指導書を指す)は教育課程に合わせ編纂され、編纂を行う機関により3分類される。1種図書(国定図書)は教育人的資源部が編纂を行ったもので、2種図書(検定図書)は検定基準に沿い大学や高校教師などが製作し、検定を受け、民間出版社が出版したものである。認定図書は教育人的資源部長官の認定を受けたもので、教科用図書がない場合や教科用図書を補う場合などに用いられる。

最近の大きな教育環境の変化として、教育現場への市場論理導入と情報化3ヵ年計画が

あげられる。教育現場への市場論導入とは生徒を消費者とみなし、選択科目を増やすなど生徒の選択権を広げることである。第二外国語でも選択科目でありながら教師不足の問題などでほとんど選択の余地がない状況であったが、教師が複数の学校を担当することで選択権を広げようとしている。情報化3ヵ年計画（97年～99年）⁴⁾は教育部が行った学校情報化政策で小中高校の全教師にパソコンを与え、学校1校につき2クラスのコンピュータ実習室を設置し、2000年春までに全教室にマルチメディア教育設備を整えることである。これにより全小中高校はインターネットでつながった。

3 高校における日本語教育

世界的に外国語教育全体が文法翻訳法的な言語構造理解中心の授業からコミュニケーション重視の授業に変わってきているが、韓国の日本語教育もまさにその歴史を歩んできている。

初めて日本語が第二外国語の科目として加わったのは第3次教育課程からである。以後「日本語」「日本語」の科目が設けられている。次の表は教育課程とその公布・適用年、出された教科書の種別と点数をまとめたものである。表1から検定教科書が使われ、その数は徐々に増えてきていることがわかる。

表1 教育課程と日本語科教科書数⁵⁾

教育課程	公布・適用	教科書
第3次	74・74	1種1点・2種2点
第4次	82・84	2種5点
第5次	88・90	2種8点
第6次	92・96	2種12点
第7次	97・02	-----

教育課程の目標をみると、第3次では言語の構造的な部分の理解に中心があり、文化面

では自国文化の紹介など、自国文化を表現することがあげられているが、第4次の目標からは日本文化理解があげられ、4技能重視傾向となった。第5次、第6次はともにコミュニケーション能力重視がうたわれ、日本文化理解に対しても引き続き述べられている。

第7次が公布された年は情報化3ヵ年計画が始まった年でもある。第7次は全体的に情報化社会に適応する人材育成が盛り込まれている。

4 第7次教育課程の特徴

第7次の「日本語」「日本語」の目標をまとめると主に次の3点が挙げられる。1点目に「正確さよりも流暢さを求め、より実用的なコミュニケーション能力の習得」。2点目に「日本文化を理解する姿勢を養い国際交流を積極的に行う態度を養う」。3点目にインターネットを取り入れるなど「情報化社会に対応した日本語能力の習得」である。

第7次の特徴として特記すべきは、今まで、第一外国語である英語の指導要領にそって作られていた指導要領が日本語科目独自で作られたという点である。その内容は目標や学習内容にいたるまで機能中心のシラバスで構成されている。

例えば、日本語の意志疎通機能として「挨拶機能」「情報伝達機能」「要求機能」「意志及び態度伝達機能」「談話展開機能」をあげ、さらに下位分類として「挨拶機能」には挨拶、紹介、安否、賞賛、激励、お祝い、慰労などの表現をあげ、さらに個々の詳しい具体的内容を別表に提示している。このように機能中心のシラバスは目標の1点目にあげたコミュニケーション能力を伸ばすためのシラバスであり、また言語行動文化理解の面も併せ持っている。

このように、学習素材に文化項目を入れ、生活文化とともに日本人の言語行動への理解が目標や内容に明記されているのも特徴の一

つである。

5 第7次教育課程での教科書

では第7次教育課程が教科書にどのように反映されているのだろうか。第6次と第7次下で出版された同じ出版社の教科書⁶⁾を比べその特徴を見ていく。

全体の構成では課に入る前に第6次教科書が「かな」の発音として長音や促音も含め説明しているのに対し、第7次教科書ではかなの発音に撥音、促音、長音のほか、拍の概念やアクセントやイントネーションなども項目立てて載せ、説明している。口頭表現に力を入れていることがよくわかる。課数は第6次教科書では1課から15課までだったものが、第7次教科書では12課までと減少した。しかし、巻末の付録は「家族に関する呼び方」や「身体に関する呼び方」が絵や表を使って表示されるなど倍以上の項目数になった。

課の構成をみると、第7次教科書は全体に聞きながら読む、読んで書くなど4技能を総合的に使った活動や練習問題が目立つ。個々を見ていくと、課の最初のページ、とびら部分には課の目標が韓国語で書かれているのは第6次、第7次教科書とも同じであるが、書き方に違いがある。第1課を例にとると第6次教科書では「新学期が始まりました。新しい友達と付き合うのはたのしいです。この課では<挨拶><自己紹介>の表現を勉強しましょう」となっているのに対し、第7次教科書では「意思疎通機能 挨拶 自己紹介」改行後「正しい挨拶、礼儀を通し、円満な人間関係を作り、いつも明るく楽しく生活しましょう」と書かれている。つまり、日本語だけでなく言語によるどのような行為を目指すのかまで学習者に提示しているのである。

また第7次教科書は、より動作と言語を結びつけ実用性の高い日本語を習得させようとする意図が見受けられる。例えば、本文であるダイアローグはマンガのようにコマ別れし

た挿絵一つ一つに発話が吹き出しの中に書かれている。挨拶表現も、第6次教科書では見られない「こちらこそ、よろしく」「ぼくはマンガがすきです。」などの新しい表現が追加されている。

練習問題提出形式は前とそれほど変わりが無い代入置き換え練習であるが、読む練習では日本人の友達に自己紹介文をEメールで送るという設定などインターネット検索を意識した活動がみられる。応用練習のページでは自己紹介を自由に書かせる、名刺を作らせるなど、創造力を使った活動が含まれている。このような学習活動は学習者の意欲を高める効果が見込まれる。

課の最後には「日本文化散歩」という文化紹介コーナーが課毎に設けられている。具体的には「学生のクラブ活動」「日本語情報検索」「スポーツ」「マンガとアニメーション」など、日本文化や日常生活など高校生でも興味を引く話題を韓国語で写真を織り交ぜながら紹介している。

このように第7次教育課程に伴い教科書も機能中心の言語行動文化にも注目したよりコミュニケーション性を意識した内容となっている。また、文化に対する記述も多い。さらにパソコン上で日本語を使用する具体的な方法など情報社会に適應できる日本語力の習得も目指していることがよく分かる。

6 今後の課題

高校では第7次教育課程での第二外国語学習は2年次からということもあり、現在、実際に第7次教育課程下の学習者はいないが、教師はこの教育課程と教科書に期待とともに不安と不満を持っていることがインタビュー調査からわかった。

まず、1点目は教師自身の能力に対する不安である。教科書だけではなく、インターネットなどの生の教材の使用はどのような語彙や表現が出てくるのかわからず、いかに準備す

るかという問題がある。そしてこれらの活動は日本語能力だけでなく教師の情報リテラシー能力も問うことになる。また、インターネット上の変化の激しい情報をいかに教科書に反映していくかという教材上の問題もある。これらの問題を解決するためインターネットやパソコンを使ったCAI教材の開発が促されている。

2点目に授業時間数の問題である。教科書でも様々な活動が盛り込まれているが、実際の授業は週2コマ程度でどれだけ消化できるかという不安がある。今までも文字を覚えるだけでも半年はかかり教科書を終わらせるのは難しかったという。ただ、だからこそ教科書にこだわらず日本や日本語に興味を持たせることに重きをおいた授業を実施していきたいとの声もあった。

それに関連し、意欲の維持、意欲に対する評価に関しても、難しいという声が聞かれた。大学入試との関係が切れない高校の科目では、いかに工夫しようとも入試が近づけば入試と関係のない第二外国語科目への意欲は下がってしまうのが現状である。日本や日本語に興味を持たせ、文化理解と国際交流をすすめようとする第7次の目標はこの問題を解決できるかが今後大きな課題となるだろう。

7 まとめ

日本と比較し、高校時から7言語の中から第二外国語科目を選択でき、その言語を時代にあった方法で文化理解と国際交流にも目をむけたシラバスでコミュニケーション能力を身につけるようとする姿勢は今後の国際化社会、情報化社会をともに生きる日本としても学ぶ点があるのではないだろうか。

本稿では、韓国の高校教科書を見てきたが、コミュニケーション能力の向上、文化理解、情報収集の手段としての日本語能力は大学でも求められている能力であり、今後、日本語教育教材はコミュニケーションの場をインター

ネットの世界にまで広げた広い視野で作成されていくであろう。

注及び引用文献

- 1) 国際交流基金『日本語教育機関調査1998』2000
- 2) 著者が2002年夏に3人の現役日本語教師(韓国人)に行ったインタビュー調査。
- 3) 韓国教育部「外国語科 教育課程()」『第7次教育課程 教育部 告示 第1997-15号[別冊14]』p.254-282
国際交流基金日本語国際センター『外国語科 教育課程()日本語版』2002 p.1-31
この教育課程は人文系(普通高校)と実業系(商業高校や工業高校など)で適用される。
- 4) 李徳奉「韓国の日本語教育界における新しい動きについて」『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編』5号 1999 p.1-13より
- 5) 第7次下での教科書の最終的な点数は現時点では調査不可能であった。
- 6) 進明出版社『日本語』柳吉東他

参考文献

- 李徳奉「韓国における日本語教育の現状と課題 - 学習指導要領・教材開発・教員養成を中心に - 」『世界の日本語教育 日本語教育事情報告編』4号 1996 p.47-56

諸外国の教科書に関する調査研究委員会[編]「韓国の教科書制度と教育課程:第7次教育課程(中学校「社会科:国史領域」)を中心に」2002.3

その他国際交流基金ホームページ等も参考にした。